

## 濱一衛先生との架空の対話

董, 上徳  
中山大学

中里見, 敬  
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/1916228>

---

出版情報 : “《春水》手稿与日中文学交流 : 周作人、冰心、濱一卫” 国际学术研讨会论文集. 1, pp.212-216, 2018-02-06. 九州大学QR プログラム「人社系アジア研究活性化重点支援」「新資料発見に伴う東アジア文化研究の多角的展開、および国際研究拠点の構築」

バージョン :

権利関係 :

## 濱一衛先生との架空の対話

中山大学 董上徳

濱一衛先生を記念する文章を、との中里見教授からの原稿依頼である。中国の戯曲研究者として、また九州大学で外国人教師を務めたこともあるものとして(2002年4月から2005年3月まで)、断るわけにもいかない。だが、何を書けばよいだろうか。

本棚から『中国文学論集』第4号を取り出す。九州大学中国文学会が1974年に刊行した「濱一衛先生退官記念号」である。表紙をめくって、濱先生の写真に向き合う。先生の風貌には剛毅さと同時に、沈着さがうかがわれる。何かを考えているようでもあり、眼差しはレンズに焦点を合わせておらず、うつむき加減である。ややはにかんだ眼光は鋭さを宿している。言いたいことを抑えているようでもあり、すぼめた口角からは温厚さと、内に秘めた意志が感じられる。瞬く間に、先生との距離が縮まったように感じられた。しかも、日本から帰国して十数年間、この「記念号」がずっと大事に私の本棚に置かれているのも、何か得難い縁であるように思われた。

机上にはもう一つ、中里見教授から贈られた『濱文庫所蔵唱本目録』(花書院、2015年)が置かれている。これは濱先生が一生をかけて中国戯曲を研究された「証し」である。この本には九州大学附属図書館濱文庫に所蔵される唱本1125冊の題名が収録されており、さらに一冊ごとに版本の特徴、刊行の情報が細かに記載されており、このうえなく有益なものである。この目録をめくりながら、当時濱先生が中国各地で唱本を探し求めている姿を想像する。その勤勉さと熱心さには、感動を禁じえない。

濱先生は1934年6月から2年間、当時の北平に留学された。身分は日本の外務省文化事業部派遣の留学生であった。中里見教授の研究によると、濱先生が収集した唱本は、北平で購入したものが大半であるが、鄭州、西安、蘇州、青島などで入手したものも一部含まれているという。濱先生は訪問先で必ず現地の戯曲・説唱文芸に関する資料を探し求めたことがわかる。先生が書かれた中国戯曲に関する一連の論著——例えば『北平的中国戯』、「平戯考」、「皮黄の成立」、「北京の劇場」、「中国戯曲劇種一覧稿」など——は、先生が収集蓄積された大量の戯曲資料と大いに関係がある。日本の学者は一次資料を重視し、フィールドワークを重視し、自身の「体験」を重視する。そうした学風は濱先生ご自身に十分体现されている。

私には一つ興味を持っている問題がある。目加田誠教授が「浜さんのこと」(「濱一衛先生退官記念号」所収)の中で次のように書かれている。「私が浜さんと識り合ったのは昭和

十年十一月の頃、北京留学中のことで、浜さんは私より半年くらいおそく北京に来られた。私が京都の小川環樹さんと同じ宿にいた関係で、京大出身の浜さんとも親しくなったのである。後に私は西城の受壁胡同の銭稻孫先生の家に入り、浜さんは八道湾の周作人先生の家に住まわれてお互いに近かったから、始終往き来していた。」濱先生はかつて周作人先生と朝晩起居を共にしていたのであり、彼が中国戯曲資料をあちこち探しまわっていたことを、周氏が知らなかったはずはない。私が興味を持つのは、中国の戯曲という話題について、周氏と濱先生の間でどのような議論が行われたのであろうかということだ。

私は想像する。もし濱先生に会えたなら、きっとこのことを質問するだろう。私はこのように言うだろう。私の知る限り、周作人先生は中国の戯曲を好まなかったどころか、大いに毛嫌いしておられました。1918年11月の『新青年』5巻5号に早くも「論中国旧戏之应废」〔中国の旧劇は廃止すべきであることを論ず〕（署名周作人、自編文集に未収録）という文章を發表しています。基本的な主張は「中国の旧劇には存在価値がない」というもので、その理由は主として二つあります。第一に、「我们从世界戏曲发达上看来，不能不说中国戏是野蛮的，……中国戏多含原始的宗教的分子，是识者所共见的。……凡中国戏上的精华，在野蛮民族的戏中，无不全备，在现今文明国的古代，也曾有过。野蛮是尚未文明的民族，正同少壮的人经过的儿时一般，也是野蛮社会时代，中国的戏，因此也免不得一个野蛮的名称」〔世界の戯曲の発展から見て、中国劇は野蛮であり、……中国劇には原始的な宗教の要素が多く含まれていることは、識者に共通の見解である。……中国劇の精華は、どれも野蛮民族の劇中にすべて見られる。現在の文明国でも、古代には存在したものだ。野蛮とはいまだ文明的でない民族であって、少壮年の人がかつて経験した子供時代と同じように、野蛮社会の時代でもある。それ故、中国劇は野蛮という名称から免れ得ないのである。〕第二に、「是有害于‘世道人心’，……内中有害分子，可分作下列四类：淫，杀，皇帝，鬼神。……在中国民间传布有害思想的，本有‘下等小说’及各种说书；但民间有不识字未听过说书的人，却没有不曾看过戏的人，所以还要算戏的势力最大”。」〔「世道人心」に有害であり、……有害な要素は、以下の四つに分類できる。淫、殺、皇帝、鬼神。……中国で民間に有害思想を流布するものには、もともと「下等小説」および各種の説書（語りもの）があった。ところが、民間には文字を知らず、説書を聞いたことのない人がいても、芝居を見たことがない人間はいない。したがって、劇の勢力が一番大きいのである。〕周氏は旧を廃し新を打ち立てようとしたのであり、「至建设一面，也只有兴行欧洲式的新戏一法，……将他拿来，省却自己的许多力气。」〔建設面に関しては、ヨーロッパ式の新劇を流行させようとしただけで、……それを取り入れることによって、自らの多大な努力を省略しようとした〕のでしょう。こうして見ると、周氏は「旗幟鮮明」であり、その立場は明確であったということが出来ます。彼は「旧劇」に対してほぼ対立する態度を取っていました。

1922年3月刊行の『戯劇』2巻3号に、再度「对于戏剧的两条意见」〔演劇に対する二つの意見〕という文章を發表しています。冒頭に次のように書いています。「我对于以前的旧戏，向来有一种偏见，——一种反感，所以近来多年没有看过一回戏。」〔私は過去の旧劇に対して、かねてより一種の偏見——一種の反感を持っている。そのためここ数年、一度も芝居を見たことがない。〕彼は二つの「消極的」な意見を提出しています。それは「写实不涉及猥褻，寓意不涉教训」〔写実が猥褻にならないこと。寓意が教訓にならないこと。〕の二点です。実際に、旧劇への批判は、つねに猥褻な要素と、説教の内容が多すぎるという点に向けられていました。その後も、周氏は中国演劇に関する文章を数編書いて、一再ならず自らの態度を表明し、「旧劇改良」を強調しています。ところが、1943年9月刊行の『古今』30期に周作人が発表した「消寒新咏」という文章には、半ば予想どおりの、半ば私の予想を裏切る一文が記されているのです。「我不喜欢看戏，却常收集些梨园史料，此殆如足迹不入狭斜者之读《板桥杂记》《南浦秋波录》乎？」〔私は芝居を見るのが好きではないが、梨園史料の収集を心掛けています。遊里に足を踏み入れたことのない者が『板橋雑記』や『南浦秋波録』を読むようなものか。〕この文章にはいくらか矛盾が感じられます。好きでないものを収集する。これは「性に随う」ことをよしとした周作人にしては、やや不自然です。彼は中国戯曲に対する考えを変えたのでしょうか。いや、そんなことはない。「芝居を見るのを好まない」のは、依然として彼の日常の態度でした。『消寒新咏』を読むことを、「遊里に足を踏み入れたことのない者が『板橋雑記』や『南浦秋波録』を読むようなもの」にたとえていることから、明らかにユーモアであることが見て取れます。だが、彼が確かに演劇史料に興味を持っていたことは、どのように解釈すればよいのでしょうか。周氏の次の一節を見ていただきたい。「近日得《消寒新咏》四册，乾隆乙卯年刊，题三益山房外编，以时代论，仅后于《燕兰小谱》十年，亦是极好资料。……其注重伶人技术者，恐只此《新咏》一卷」〔最近、『消寒新咏』四冊を手に入れた。乾隆乙卯年の刊行、三益山房外編と題してある。年代からいうと、『燕蘭小譜』に後れることわずか十年、これもまた絶好の資料である。……俳優の技術に注目することにおいて、この『新咏』の右に出るものはないであろう。〕まさに張次溪の『燕都梨園史料統編』が、『消寒新咏』の書名を採るだけで、この本を収録していなかったからこそ、周氏はなおのこと『消寒新咏』を珍重したのです。私が特に強調しておきたいのは、周氏のこの文章が發表されたのは1943年、すなわち濱先生が彼の八道湾の邸宅に寄宿した後であるという点です。戯曲資料の収集に精力を傾けた濱先生の影響を受けて、周氏はこの種の資料を「重視」し始めたのではないのでしょうか。

おそらく濱先生は謙遜して次のようにお答えになるかもしれない。周先生はご自身のお考えをお持ちで、簡単にご自分のお考えを変えるようなお方ではありません。周先生が1950年にお書きになった「戯文故事書」という文章をご覧になりましたか。そこには次のよう

に書いてあります。「向来知道有《戏考》一书，卷数甚多，因懒终于未曾一翻阅，究竟不知道是只录戏词，抑或是记述戏文情节，如《中国吟边燕语之类》。」〔『戲考』という書物があることはかねて知ってはいるものの、あまりにも大部な書であるために、いまだ一度も繙いたことがない。はたして芝居の詞（歌詞、セリフ）が記されているだけなのか、それとも戯曲のあらすじまで書いてあるのだろうか。まるで中国版の『吟边燕語』のように。〕【訳注：林紓訳の『吟边燕語』は、チャールズ・ラムの『シェイクスピア物語』を翻訳したものの。ここではシェイクスピアの戯曲を読まずに、てっとりばやくその内容を知るための本という意味合いで使っている。】どうですか。先生は『戲考』すら見ようとされなかったのです。「依然としてもとの我のまま」ではありませんか。

だが私は次のように言うだろう。濱先生、しかし一つの可能性を排除するわけにはいきません。先生が北平で東奔西走して、塵埃まみれでヘトヘトになって八道湾へ戻ったとき、先生が持ち帰った『武家坡』、『大姑娘守節』、『小大姐偷杏』、『西厢子弟書詞六種』などの唱本を周先生はきっと目にされたはずではありませんか。あなたがあれほど熱心に唱本を買い求められたために、周先生も関心を持たれるようになったのではありませんか。周先生は確かに戯曲を重視していませんでしたし、唱本を収集することもなかったでしょう。しかし、周先生といえば以前より女性問題に関心を寄せておられた方です。あなたが持ち帰った『大姑娘守節』、『楊姑娘思夫』などのテキストは、周先生にとっては、一生懸命探していたものが思わぬところで見つかった、ふと手に取ってみて、つつい引き付けられ、もしかすると中国の女性問題を研究する新資料になるかもしれない、と思わせるようなものだったかもしれませんよ。

おそらく濱先生は笑って言われるだろう。ハーハーッ、それはどうかな。

私は濱先生に言う。周先生は晩年、戯曲に対する考えが多少変わったように思います。1950年6月18日の『亦報』に発表された「五美图」と題する文章に、次のように書いてあります。「《五美图》之类的戏文大概也编得很平常，不过他看穿有些人生的黑点，用花脸表现出来，很有意思，也很有价值。」〔『五美图』のような戯文はおそらくごくありきたりの作品といってよいだろう。だが、人生の暗黒面を見抜いて、それを花臉（顔に隈取をする役柄）で表現しているのは、おもしろいし、価値がある。〕周先生がなんと「価値がある」とまで言っておられるのは、大胆に想像するなら、やはり先生の影響があったのではありませんか。

……

この架空の対話は、私が濱先生の一生の苦勞と功績を振り返ったときにふと思いついたたんなる滑稽なお話に過ぎないかもしれない。だが、濱先生の中国社会に対する理解と見識、周作人先生の日本人の思考法に対する熟知、日本人学者の学風に対する尊重、濱先生

と周先生の当時の八道湾のお宅での諸々の会話、これらを思うとき、人々は想像の翼を広げて、ついあれやこれやと思いを馳せてしまうのである。

中里見教授からの原稿依頼によって、「稚児の他愛のないお話」のような拙文を草する羽目になってしまった。中国の虚構文学を好まれた濱先生のことだから、きっとお許しくださるのではあるまいか。

2017年12月3日 広州中山大学にて

日本語翻訳：中里見敬